


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 5 月 20 日

所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	楊木 萌

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
瀬戸臨海実験所・京都市動物園・生態学研究センター・霊長類研究所・日本モンキーセンター
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
インターラボ
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 4 日 ~ 平成 26 年 4 月 9 日 (6 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
理学研究科生物科学専攻
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回のインターラボでは、計5日間の中で、京都大学理学研究科の各施設を見学した。
日程 4月4日 オリエンテーション 懇親会 4月5日 瀬戸臨海実験所(白浜泊) 4月6日 瀬戸臨海実験所 4月7日 入学式のため休み 4月8日 京都市動物園・生態学研究センター 4月9日 霊長類研究所・日本モンキーセンター
瀬戸臨海実験所(4月5日-6日) 今回の実習で、我々の班は干潟の生物の観察、水族館の見学及び熊楠記念館の見学を行った。干潟の観察では、観察できた生物について教授が直に解説して下さったため、非常に興味深い時間となった。熊楠記念館についても館長による解説が素晴らしく、南方熊楠という偉大な研究者についてさらに詳細にわかりやすく知ることができた。実験所の方々、熊楠記念館の方々がとても親切に我々を受け入れて下さり、楽しい時間を過ごすことができた。

図 1. 熊楠記念館の屋上で

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

・京都市動物園(4月8日)  
バックヤードツアーなどを通して、動物園の動物たちがいかに管理され、生活しているかを垣間見ることができた。また田中先生はじめ、今回の見学中に解説をしてくださった先生方が繰り返し仰っていたことは、動物園と研究機関の連携の重要性についてであった。絶滅危惧動物を研究する上で、飼育下での研究の機会が動物園での研究を除いて他にないだろう。このような貴重な研究の場を確保するためにも、動物園とのよりよい関係を作り上げ上手に連携していけるよう、研究者の努力が求められていると感じた。



図2. ニホンザル



図3. アジアゾウ

生態学研究センター(4月8日)  
これまであまり話を伺ったこともなく、実際に訪れたのも初めてであったため、非常に興味深い時間を過ごすことができた。研究室ごとで分かれて研究を行っているのではなく、共同研究施設として運営されていることにも大きな魅力を感じた。半日のみの短い時間であったが、最初の講義で様々な教授の研究内容をお聞きすることができ、さらにツアー形式で研究センター内の見学も効率的に行うことができていた。

霊長類研究所・日本モンキーセンター(4月9日)  
霊長類研究の最先端を担う施設を見学でき、非常に興味深かった。チンパンジーの認知実験の実験施設の充実さにも驚いた。その後、世界でも最多種の霊長類を保有している日本モンキーセンターでの見学も行うことができ良かった。もう少し見学の時間があれば、と思うほど園内は充実していた。バックヤードツアーも行っていただき、貴重な時間となった。

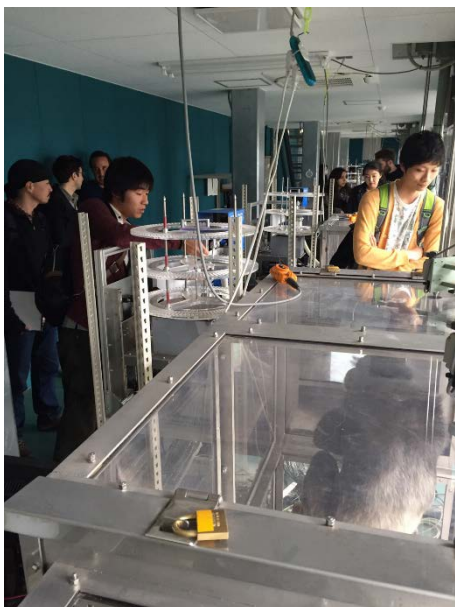


図3(左図). 霊長類研究所内の様子



図4(上図). 日本モンキーセンター

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### 全体として

今回のインターラボでは、瀬戸臨海実験所、生態学研究センター、霊長類研究所の三拠点で行われている最先端の研究を目の当たりにし、改めて京都大学の研究施設の豊富さ、研究環境の充実さを知ることができた。また、それぞれの研究施設が自らの研究機関に自信を持ち、独自の研究を行っているように感じられた。海洋生物、霊長類、さらにその他昆虫や植物など、対象とする生物は多岐にわたり、また興味の対象や実験内容もそれぞれの研究施設、また研究者によって様々であった。このように様々な視点から生物多様性研究を続けていくことができる環境があるということは、一つの思考に凝り固まらずに研究を行えるという点で非常に魅力的なものである。今後もこの歴史ある研究施設たちを京都大学の財産として保ちつつ、更に他分野の研究も含め連携し合う機関となってほしい。入学式前から一週間にわたり行われたインターラボでは、研究所の見学や研究内容の講義以外にも、分野の異なる学生たちと共に話し合い意見を交換できたことが大きな収穫であった。通常なら研究室が異なれば全く会うこともなく、分野が異なると話をする機会もなかなかないのだが、今回のインターラボの中でそれぞれの研究の様子や研究室の雰囲気などを知ることができたのは良かった。土日一日中費やすため疲労の蓄積は否めないが、それを考慮しても今後とも続いていくべき行事であると思う。

### 6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディング大学院プログラムの援助を受けて行いました。インターラボを行うにあたって宿多くの手配をしてくださった PWS 支援室の左海様、秋山様に深く御礼申し上げます。また、引率して下さった動物学教室の田所先生、森本先生、中村先生、現地で対応してくださった瀬戸臨海研究所の久保田先生、京都市動物園の田中先生、生態学研究センターの谷内先生、霊長類研究所の古市先生、服部先生、日本モンキーセンターの早川先生をはじめ、尽力いただいた皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。